

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 21 2017*

英語教師のための基本文献案内(5)

加 島 巧・川 島 浩 勝・藤 内 則 光
原 田 依 子・藤 原 和 政

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (5)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu
FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko
FUJIWARA Masakazu

長崎外大論叢

第21号
(別冊)

長崎外国語大学
2017年12月

【書評】

英語教師のための基本文献案内(5)

加島 巧・川島 浩勝・藤内 則光
原田 依子・藤原 和政

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (5)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu
FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko
FUJIWARA Masakazu

Abstract

In what follows we offer the fifth bibliographical guide of four basic books for teachers of English. The first book was selected from English Philology, and the second one belongs to the English education in the elementary school. The third and fourth ones were chosen from the same book on the comparative linguistics between English and Japanese written from the different points of view on the different linguistic studies, theoretical linguistics and English pragmatics, respectively. The fifth one was on the psychological approach to the classroom management.

1. 『フィロロジーへの道』 ……………KASHIMA Takumi
2. 『外国語音声の認知メカニズム
—聴覚・視覚・触覚からの信号—』 ……………KAWASHIMA Hirokatsu
3. 『「する」と「なる」の言語学
—理論言語学からの視点—』 ……………FUJIUCHI Norimitsu
4. 『「する」と「なる」の言語学
—理論的視点から—』 ……………HARADA Yoriko
5. 『授業づくりのゼロ段階』 ……………FUJIWARA Kazumasa

1. 小野茂著『フィロロジーへの道』

研究社選書19

昭和56年（1981年） 研究社 1298-198019-1860

今回推薦する本は、当時東京都立大学教授であった小野茂（1930–2014）が昭和56年に著した『フィロロジーへの道』である。当時、夢中になって読んだ記憶がある。自分が専門を決めるにあたり、影響を受けた本は、これまでも紹介してきたが、この本は、自分が専門を決めて、論文を書き始めようとした時に大きな影響を受けた。ひとりの英語・英文学者の英語との関わりが、英語との出会った時から38年間の流れを時の流れに沿って書いてある。

著者の小野茂は、英語史の中でも、法助動詞の研究で有名で、『英語法助動詞の発達』（1969年）の

出版までに至る道は第6章に書かれている。

私が学生の頃、古英語を勉強するには、市河三喜(1886-1970)の『古代中世英語初歩』が最初のテキストであった。次に、Henry Sweet(1845-1912)の*Anglo-Saxon Primer*で文法のおさらいをし、次に、*Anglo-Saxon Primer*に付属の読本を読み解くことがオーソドックスな勉強の仕方であった。そして、同じくHenry Sweetの編んだ*Anglo-Saxon Reader*に進むのが一般的であった。そうこうしている内に、論文を書く対象を決めるのであるが、結局、7つ現存している古英語で書かれた年代記の中化から、ピーターバラ年代記の文法記述で論文を書くことを決めたが、小野茂のこの本には、参考にすべき基本的な文献や古英語の辞書、さらに、注意する点がちゃんと書いてあって、とても参考になった。例えば、*Anglo-Saxon Reader*は、元々初学者のために編まれたのではないのに、しばしば初学者によって用いられて来たので注意することや、作品を読むにあたり、註が大切な点など。その点、初学者は、A.J.Wyattの*An Anglo-Saxon Reader*の方が使いやすいと指摘している。(pp. 74-75) Henry Sweetの*Anglo-Saxon Reader*は、Dorothy Whitelockが改訂した第15版(1967)よりもC.T. Onionsが改訂した第12版(1950)の方が語学的に良いという文章など(pp. 74-75)は、今読んでも、決して色あせてはいない。このOnions版を偶然入手することが出来た。1991年にCambridgeを訪れた際に、古本市が開かれており、本が積まれている屋台の上で見つけた。£2だった。前の持ち主であろうKing's College LondonのPeta Jane Walkerという学生(?)が1961年に買ったこの本には、(購入した日付と名前が書いてあったから。)かなりのページのテキストにびっしりと鉛筆で書き込みがしてあった。

第1章「出会い」では、昭和18年(筆者は昭和5年生まれ)の7年制の旧制高等尋常科に入学試験を受験する場面から始まる。戦争、終戦となり、授業が再開される。尋常科3年(昭和21年)に買った本が書いてあるが、齊藤勇著『英文学史』、中島文雄著『英語の常識』だそうで、思わず唸ってしまった記憶がある。尋常科4年の時に出てくる本は、雑誌『英語青年』、(これをきっかけとして、毎月の定期購読が始まったようです。)岩波文庫の『ベオウルフ』(厨川文夫訳)、同じ著者の『古代英語』だそうである。びっくりするような高度な本を読んでいるようだが、「何日かは夢中になったものの、結局投げ出してしまった。」とその直後に書かれてあったので、「ほっとした」記憶がある。この本には、文献学の基本的な参考書がいたるところに示してあって、それがとても役に立つ。

第2章「英詩と英語史」は、昭和22年に高等科に進んでからのことが書いてある。物語は、学年の進行と動詞に進み、第3章「語学か文学か」、第4章「卒業論文へ」となる。この3章は、著者と英語・英文学との若い学生時代の関わりが書かれており、自分の専門を決めていく過程は、読者には参考になる部分であろうし、ここに挙げてある文献や論文は本当に基本的な参考書であり、そのことは、この本の価値を高めている。

第2章からは、市河三喜著『聖書の英語』と『英語学-研究と文献-』の二冊。第3章からは、中島文雄著『英語学研究方法論』、『意味論』、『文法の原理』Otto Jespersenは、*Essential of English Grammar, The Philosophy of Grammar*、細江逸記著『動詞時制の研究』、時枝誠記著『国語学原論』を挙げる。第4章からは、Otto Jespersen, *A Modern English Grammar VII, Bohumil Trnka, On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden*, C.C.Fries, *American English Grammar* を挙げておく。

第5章の「論文を書き始めた頃」からは、著者がいよいよ研究者としての道を歩み始める時代へと

入る。ここから、この本のもう一つの面が始まるわけで、著者がどのような英語の現象に興味を持ち、どのように分析して行くのかが分かる。現代英語では、shall, will, may, must となった四つの助動詞の用法と体系的な変化を歴史的に証明しようとしたのはじめた頃の話がこの章の中心で、その研究の区切りとして、『英語法助動詞の発達』という本になるが、それは6章で詳しく述べられている。

第7章「チョーサーの英語」では、著者の研究対象が古英語から中英語に広がったことが分かる。集める例が多くなればなるほど、広がれば広がるほど論文の説得力は増すわけで、研究対象の時代の幅が広がれば、第8章「連続性」の問題で述べるように散文の連続性という重要な問題にもある種の答えが与えられるかもしてない。

第9章「古英語の語彙」では、先に述べた『英語法助動詞の発達』（1969年）の後、著者の興味の一つが語彙研究に移ったことも示している。それは、1989年に *On Early English Syntax and Vocabulary* (南雲堂) として結実することになる。第9章は、その前書きとして読むことが出来る。

最後の第10章は、「道の半ばで」という副題で、これまでの仕事と、フィロロジの概念をもう一度まとめている。そこでは、言語学と文献学の概念を説明し、二つの概念を議論することは不毛なことで、二つの間に境界を定めることも無意味だと言う。つまり、二つの学問領域は両立するのである。

(p213) 1940年(昭和15年)に出版された研究社の『英語学辞典』が1982年(昭和57年)に『新英語学辞典』として改訂されたときに、英語表記は、THE KENKYUSHA DICTIONARY OF ENGLISH PHOLOGY から THE KENKYUSHA DICTIONARY OF ENGLISH LINGUISTICS AND PHILOLOGY となったが、これは、日本における英語学が Philology から Linguistics に変わったのではなく、フィロロジ(文献学)的なものとリングウイステックス(言語学)的なものが両立することを表しているのではないか。

ここに紹介した『フィロロジの道』(1981)は、『フィロロジの愉しみ』(南雲堂 1998年)『フィロロジスト 言語・歴史・テキスト』(南雲堂 1998年)『フィロロジのすすめ』(開文社出版 2003年)へと続くことになる。1981年に出版された『フィロロジの道』に加え、前年の1980年に中尾俊夫(1934-2000)との共著で大修館書店の英語学大系の第8巻として出版された『英語史I』は古英語全般を概観する日本語で書かれた最良の参考書であることを最後に述べておく。

2. 中森誉之『外国語音声の認知メカニズム—聴覚・視覚・触覚からの信号—』

開拓社、言語・文化選書59、2016、212ページ、ISBN 978-4-7589-2559-4

2020年度より公立小学校(5、6年生)において英語が正式に教科として教えられることになっており、現在、小学校英語教育と中学校・高等学校・大学での英語教育との有機的繋がりに関する議論・研究が盛んに行われている。そのような中、小学校英語教育における音声指導の成果を中学校・高等学校・大学でどのように発展させるか、といったことがしばしば議論・研究の対象となるなど、英語音声学習・指導そのもののあり方が見直されるようになってきている。

校種を超えて体系的な英語音声指導を行うためには、英語音声学習の本質を踏まえ、英語音声に関する認知メカニズムを知る必要がある。本書は、外国語音声に関する認知メカニズムを扱ったもので、一般的な英語音声指導に関する本質的な問題を踏まえながら、英語音声学習・指導の本質に対する理解を深める知見や視点が提供されている。

例えば、本質的な問題として、次のような見解が述べられている。

「読むことができるようになると、書くこともできるようになる。同様に、聞くことができれば、話すことも可能である」との、経験則に基づく教育界の言説は、科学的根拠をどこに置いて主張しているのだろうか。(p. 55)

このような問題に対して、「成長の過程で周囲から与えられる言語刺激の音声情報と、自ら発話する声が出発能力獲得には必要であるが、音声を知覚する能力は発話技術を必要とはしない」(p. 57) というような論が、日本人英語学習者に見られるL/R音における識別困難性の例とともに、展開されている。

全部で5つの章(第1章「音の知覚」、第2章「音声の表出－調音コントローラー」、第3章「聴覚、視覚、触覚信号の融合」、第4章「英語音素の記述と学習上の諸問題」、第5章「音声習得と外国語学習」)で構成され、認知科学を中心に音楽心理学、音声学、音響学など多岐にわたる関連領域の研究成果を整理統合しながら外国語音声の諸相を多面的かつ有機的に捉え、これからの外国語の音声研究に対する方向性が示されている。

ここでは、第1章「音の知覚」、第3章「聴覚、視覚、触覚信号の融合」、第5章「音声習得と外国語学習」に焦点を絞り、外国語音声に関する認知メカニズムがどのような枠組みで論じられているかを紹介する。

第1章(「音の知覚」)は、人間の音声知覚に関する研究の成果を踏まえ、人間が聞く音声を包括的に捉えようとしたものである。この章を全体的に見ると、先ず、音とは何か、という根源的な問に対する回答が試みられている。関連先行研究により得られた様々な知見がコンパクトに纏められ、1) 物理的解釈(周波数や振幅等)、2) 知覚的解釈(高さや大きさ等)、3) 感覚的な特徴(低い－高い、静寂－轟音等)のフレームワークで人間が知覚する音が定義付けられている。

実際人間は多種多様な音を聞くが、次に、進化の過程で獲得した音声としての音楽や言語の知覚に関して考察を行っている。「音楽の音」の知覚に関しては、1) メロディ、トーン、リズムといった音楽に関わる音の基本的構成要素、2) 音への反応と生得性<「乳児は生後3ヶ月から6ヶ月頃になると、周囲の大人が歌う子守歌や童謡などの音楽に対して、反応を示すようになる。」(p. 11)、3) 音楽と言語の共通点や相違点などのテーマが論じられている。例えば、音楽と言語の共通点に関しては、次のようなことが述べられている。

音楽と言語では、高さや時間の感覚、和声、意味解釈のための名詞や動詞といった品詞の、心的表象は異なっているが、学習した音声を分析し分類し、記憶する能力によって支えられている。

(p. 25)

「言語の音」の知覚に関しては、1) 聴覚システム、2) 聴覚能力の分類、3) 外国語の聴解、の観点からその複雑性が論じられている。聴覚システムについては、聴覚器官の特性や個人差を包含する解析器官などが取りあげられ、例えば、調音器官の形状の違いが発音の個人差となって現れ、/i:/の周波数成分が、概して、男性で340、2300、3000ヘルツ、女性で440、2800、3300ヘルツ、子供で450、

3200、3700ヘルツになることなどが指摘されている (p. 32)。聴覚能力の分類については、12の聴力構成要素 (音の記憶の幅や音声配列能力など) が取りあげられ、また、外国語の聴解については、連続音声の知覚や日本語の音声構造モーラの転移の点から、母語とは異なる音素と音声体系、音韻規則に対して即座に対応することが難しいこと等が考察されている。

第3章「聴覚、視覚、触覚信号の融合」は、聴覚情報と視覚情報、視覚情報と触覚情報がいかに統合され、情報処理が行われるかを解説したもので、先ず、光感覚、色感覚、奥行き感覚、運動知覚の面より、視覚の定義がなされ、次に、1) 顔の音声情報、2) 複数の感覚器官による情報の統合、などの観点から聴覚、視覚、触覚信号の融合が論じられている。

1) の「顔の音声情報」については、例えば、音声言語の理解には視覚情報が重要な役割を果たし、騒音の中では、英語母語話者は相手の口を見ることにより、相手の言っていることを理解しやすくなり、また、相手の唇の動きを読むことにより、英語音声言語の30%程度の理解は可能になることなどが論じられている。唇の動きを読むことの重要性は、言語習得の観点からも考察され、「音声言語では、唇の動きを読むことによって、心的辞書にアクセスするための音声情報を得ることができるので、顔を見ることは、乳児の知覚経験の中で重要な位置を占めている」(p. 92) こと等が指摘されている。

2) の「複数の感覚器官による情報の統合」については、情報伝達において文字と音声、表情・行動と音声、映像と音声がお互いに補完し合い、複数の感覚器官の信号により精度が高く、深い理解が可能になることが論じられている。そこでは、例えば、「地下鉄の構内アナウンスが流れる前に、電車が接近してくると風の動きを触覚で感じ、ゴーと聴覚がとらえ、遠くに光るヘッドライトの明かりを見て、車体の入線を視覚で確認する」(p. 95) 等と述べられているが、これは、脳が複数の感覚器官からの信号を用い、最適な判断を下すためだとしている。

第5章(「音声習得と外国語学習」)では、1) 外国語音声学習の原理、2) 聴解技能、3) コミュニケーションと聴解・発話、4) 円滑な音声処理とチャンク、の4つの観点から音声をベースとした外国語学習法のあり方が考察されている。例えば、1) の「外国語音声学習の原理」については、学習の促進要件が考察され、「なにを、どのように学んだかについて、内省することにより、既習事項と新出事項を融合し、知識の拡充を図る」(p. 146) ことの重要性が論じられている。また、2) の「聴解技能」については、リスニングにおける大脳皮質聴覚野の機能(他の部位と連動しながら音声情報を処理し、必要に応じて、話者の口の動きや表情などの視覚情報等も統合する)について論が展開されている。さらに3) の「コミュニケーションと聴解・発話」では、言語習得や外国語学習における言語の音響的特性の獲得における音声言語の知覚と表出が果たす役割が述べられている。

以上の3つの観点による考察を踏まえ、チャンク(連続音声における意味を構成する複数の単語からなるまとまり)の処理によるコミュニケーションのための聴解・発話に関する指導法が考察されている。下記はそのポイントを纏めたものである。

- ① 事実を聞き取る：聞き取るべき内容や詳細を正確に把握する。
- ② 選択的聴解：自然音や複数の音声が入り交じる状況の中で、必要な情報を確実に聞き取る。不適切な表現形式を抽出し修正する。
- ③ 要点把握：主題文や、段落の中で重要な文を見つけ出す。聴解・読解の内容に対する要約を口頭で行う。

- ④ 価値判断：主張と例、論理を正しく理解して話者の意図を解釈する。自らの意見や見解、解釈を述べる。

(p. 173)

音声指導を正しく行うためには、教授者には音声学の知識が必要で、小学校段階での英語教育を考えると、英語教員養成課程では、音声学・音韻論の講義と演習を充実させて必修とし、その専門家の養成も必要になる (p. 180) が、先ずは、音に対する理解を深め、様々な知見を英語教育というコンテキストの中で有機的に結びつけて行く必要がある。本書の意義は、まさにここにあると言えよう。本書を読むことにより、英語音声指導の重要性を再認識し、同時に、今後の研究課題が明確になるであろう。

3. 池上嘉彦著 「する」と「なる」の言語学 —理論言語学からの視点— 大修館書店 ISBN 4-469-22032-9

本書は「日本語叢書」と分類されているように、主に日本語の視点から英語との比較を行うことにより、Hjelmslev の場所理論に基づいた言語類型を構築するものである。よって、日本語が母語である英語教員にとって身近に手が届く、かつ最良の言語学研究の専門書である。本書の後に続く様々な言語理論を読了している研究者にとって、本書の記述が種々の理論言語学を、例えば原理と媒介変更のアプローチによる生成文法や概念意味論などを想起させるであろうが、本書のベースとなるのは場所理論であり、内容を理解するのに実際はそれらの知識は必要なく、むしろ本書を読了することはそれらの理論言語学の理解に有利になると言える。教育者として、もしくは研究者として、出来るだけ早い時期に読了しておくことを強く奨める。教職学生にとっては、大学院修了までには読了すべきである。以下に本書を理解するのに絶対に必要な要素を紹介するが、すべてを網羅することは字数の制限より不可能である。

本書の根幹

本書の動機は、日本語に代表される「なる」型の言語と、英語に代表される「する」型の言語がどのように共通しどのように異なっているかを理論的に記述することである。本書の前提は、(1)言語が記述する外界の出来事は、「状態」と「変化」であり、「状態」の「変化」は「状態」であること、(2)「変化」の言語学的表記に必要な構造型は有限個であること、(3)具体的な構造型が抽象的な表現に転用されること、(4)「状態」と「変化」はそれだけで余剰のない完全な分類を構成し、それらの言語表現に用いられる構造型を規定すれば、言語のすべての構造型を規定したことになること、である。

「状態」と「変化」は最も基本的な形としては X BE WITH Y と表現される構造型で表記される。本書で最も困難で最も重要な点が、この構造型が何を意味するかを正確に理解することである。X と Y は共に項で、言語の一般的な特徴としてそれらは具体的なものから抽象的なものへと変化し、またどちらに主題が置かれるかによって構造型に派生が生まれる。BE と WITH は論理的述語で、BE は動詞的な表現を担当し、WITH は場所的な関係を表現する関数で、それぞれは項の具象性あるいは抽象性によって、もしくは BE と WITH の抽象性によって、現実の言語ではそれに類する別々の表

現に翻訳される。X 項と Y 項の主題性の交代により、BE と WITH は順序が入れ替わることもあり、また BE + WITH で別の述語に書き換えられることもある。ここを理解できれば、本書は汲めども尽きぬ知識の宝庫となる。

具象的な表現から抽象的な表現へ

「状態」と「変化」は、項が具象的なものから抽象的なものに変化するにつれて同様に抽象化していく。同じ前置詞句である in the room と in the morning と in danger では、in に続く名詞句が抽象化していくにつれ in の辞書的な意味に変化があるが、in 自体は名詞句が枠の中に存在することを表す。「机ヲ動カス」と「心ヲ動カス」では、表現の枠は変化しない。ただし、机は場所的に移動可能だが心はそうではないので、意味構造には差が出ることもありうる。それは表現形式においても同様である。

場所の状態も文法的機能と考え、場所を表す前置詞句に格を認めるのが場所理論であるが、ここは生成文法の主題役割や概念意味論においても同様の主張がある。ただし、本書の参考文献には Chomsky と Jackendoff の著作は含まれておらず、これは場所理論からの本書の主張である。本書の格は項の主格性、能格性、位格性、斜格性によって、もしくはそれらの組み合わせによって規定されている。他動詞の規定にかかわる能格性は、本書の使役と受け身のセクションで重要となるが、非対格動詞と非能格動詞に関する理論言語学を想起させる。

共通の構造型

Two people are in the room.

Two people are in the wrong.

Two of these books belong to Mary.

Mary has two of these books

本書では、構文の意味にかかわらず深層的には共通の構造型が共有されていると考えているが、深層と表層の写像は深層に対する変形規則ではなく表層のパラフレイズによって行っている。存在や状態、所有とその変化という基本的な構文ではその深層的な構造型が表層に現れているとし、基本的な構文に基本的な構造型を見出し、派生的な構文ではそれを書き換えることにより並行させている。例として John went crazy. を John went to craziness. に書き換えて場所の変化としている。共通の構造型は、存在や状態、所有をすべて表すことが出来る動詞として be 系統の動詞を中心にし、「具象・抽象の場所表現」+「位格表示」+「存在を表す動詞」としている。それが「僕ハウナギダ」や「ノデア」 「テイル」表現を扱う断章の中で、X 項を主題とした X BE WITH Y 型、Y 項を主題にした WITH Y BE X 型、Y 項の主語性と X 項の目的語性が強まった結果 WITH が消去され BE が HAVE に置き換わった Y HAVE X 型に拡張されている。

BE 型言語と HAVE 型言語

状態変化の表現型の分類と構造型の検討により、言語は BE 型言語と HAVE 型言語に分けられている。しかしながら、X 項と Y 項がそれぞれ具象的か抽象的か、また両者の関係が具象的か抽象的かによって表現型が多様化する。その際、名詞句の抽象性によってその変化の記述が具象化できない、

もしくはもはや名詞句ではなく副詞として表現されることもある。そのため言語には人間中心とそうではない二つの記述モデルが提案されている。The bell [has begun ringing.] では、おおよその学習者も研究者も begun は動名詞 ringing を補部にする他動詞と考えるが、この意味構造は [The bell ringing] has begun.とも考えられ、この構造は [The bell ringing] という状態が「アル」という意味で BE 型言語の意味構造になる。実際 OED においては、学校英文法が動名詞や to 不定詞を補部にすると考え begin の用法を自動詞として記載している。

起点と到達点

Y 項が状態変化の中心点であるか、X 項と Y 項のどちらを主題とするかによって Y 項の主題化と主語化が分類されるようになり、先の構造型にある BE WITH の他に GO/COME TO が、HAVE の他に RECEIVE が加えられ、さらに X 項と Y 項の主題性・主語性の順序により BE WITH は BECOME WITH に、HAVE は GET に書き換えられた構造型が提案されている。加えて、それらの項が起点であるか到達点であるかの解釈により、起点表示が有標的で到達点表記は無標であることが述べられている。また到達点の未来性を考慮して FROM X と TO X の交代と同じく FROM X と TO X の交代も規定され、TO X は未来への到達として目的を表すことが出来ることが述べられている。起点と到達点の交代を組み込み、基本構造型は X GO/COME TO Y から X GO/COME FROM Y に、所有権の変化は Y GET X から Y LOSE X へ、状態の変化は Y BECOME WITH X から Y BECOME OUT OF X、Y GET X から Y LOSE X、状態は Y HAVE X から Y LACK X に拡充している。生成文法の句構造規則や厳密下位範疇化素性、概念意味論の概念述語などが同様の理論を別の方法で記述しているが、それらを分かって本書を読むとそれらの類似性に気が付き、分からずに読んでもそれらの理論言語学の理解に資する研究である。

使役と受身

起点である Y 項が人間であり、他動性の起点であるとより強く考えられる場合、構造型から使役と受身が導き出される。起点である人間が Y 項、命題内容が X 項に入ると Y CAUSE [S] といういわゆる使役となる。これは結果として Jackendoff の概念意味論が記述する三項動詞の式型と並行する。使役性が低い場合は Y LET [S] となる。起点や動作主を場所化した場合が「私達、六月ニケッコンスルコトニナリマシタ」に対応する。これには主題はあっても主語はなく、対応する英語は AT US, [] BECOME TO GETTING MARRIED のようなパラフレイズとなり、英語話者と日本語話者のズレを示唆する。受身の場合は、X 項が主題の場合は CAUSE [X GO/COME TO Y]、Y 項が主題の場合は CAUSE [TO Y GO/COME X] と表記され、命題部分の記述が先のように変化する。

本書でも三項動詞に対応する構造型は考慮されていて、基本型では X GO/COME TO Y FROM Z または Z CAUSE X TO Y、主題を起点や到達点とは異なる W とした場合には能動型が W CAUSE X TO Y、受動型は W GET X FROM Y となる。さらに能格性までを考慮に入れると、対格言語では「スル」型が A MOVE B、「ナル」型が B BE MOVED、能格言語では「スル」方が BY A B MOVE、「ナル」型が B MOVE と記述されている。

英語には自動詞に書き換わる他動詞、つまり非対格動詞は存在するが、英語自身は能格言語ではないので、能格性の理解には場所理論に基づく本書の分かりやすい観察を讀了しておくことが重要である。

「スル」言語と「ナル」言語

本書を途中まででも読めば、日本語は「ナル」言語、英語は「スル」言語と結論的に理解できようが、「スル」と「ナル」は言語のいくつかの特徴、例えば人間中心性、「モノ」と「コト」の区別、動作主主体性と出来事中心性が組み合わさって表現されるものであり、動作主中心の「スル」言語の特徴は日本語にも存在し、出来事中心の「ナル」言語の特徴は英語にも存在する。その言語の特徴によりどの表現型がより多く用いられるかが異なるだけである。ただし、本書の構造型は英語を意識した形で記述され、論述は英語との並行性を意識して行われている。本書は正しくは日英比較叢書であろう。

英語学修者、英語研究者、英語教員にとっての本書の役割

日本語母語話者の英語学修者、英語研究者、英語教員にとって、一般に日本語を母語とすることはフランス語を母語とするより英語学修にとって不利であると考えられている。一般的に妥当な主張ではあるが、日本語母語話者にとっても日本語の構文の特質を深く突き詰め、英語のそれと深く対照研究することは、日本語を用いて英語を教授する、もしくは教授を受ける際にこれほど有利になるものは他にない。母語を分析言語である英語のように分析的に研究することによって、できることは増えることはあっても減ることは決してない。母語でできないことは外国語でできないならば、つまり足りないのはむしろ日本語の方の入力であって、英語の入力を増やしても、本書が解説するような「それを受け止めることが出来る日本語」がなければ十全に吸収できない。その意味で日本語の構文研究と英語学の橋渡しとなる本書は、学修者が読破することを忘れることが許されない優れた専門書である。

4. 池上嘉彦著 「する」と「なる」の言語学 —理論的視点から—

大修館書店 ISBN 4-469-22032-9

1. はじめに

本書は、主に英語と日本語を用いて、言語により異なる表現方法の傾向を類型論的に論じたものである。

言語研究における意味の重要性が認識されるようになって久しいが、1970年後半頃までは、具体的な意味研究のアプローチの方法論が確立されていなかったため、形式のみに注目していたのでは説明しきれない現象が多いことは認識されていながらも、なかなか意味が研究対象の中心に取り上げられることは少なかった。その後、日本においても、認知言語学的視点が注目され、意味研究が本格化していくが、本書はちょうど日本における文法研究が、記号のみを扱ったものから記号と意味との関連を扱うようになる、パラダイムの過渡期といえる試行錯誤の時期に出版されたものであり、日本における意味研究の基盤となった本の一つといえる。その意味で、言語学者のみならず、言語を教える外国語教員、日本語教員にとっても必読書の一つとして挙げてよい。本稿では、意味論的、言語理論的観点から本書の特徴を紹介してみたいと思う。

2. 「場所理論」

本書の分析は「場所理論」と呼ばれる枠組みにおいて行われている。

「場所理論」とは、物理学における「場の理論」をもとにしており、近代的なニュートン力学をもとに、個体から因果関係を導き出すパラダイムから、「場」において事物がどのような相互作用を引き起こしているか、そこから現象の因果関係を説明するパラダイムへと変化したものであるといえる。言い換えるならば、各要素のみから因果関係を導き出すのではなく、要素が置かれた「場所」も分析の対象に含め、「場」を含めた要素間の相互行為が、どのような因果関係を引き起こしているかを導き出すものである。これは、歴史的にみるならば、個々の要素から因果関係を導き出す原理のみならず、近代科学の原理である「主客分離」とも対置されるものである。

ただし、実際に言語研究で援用されている「場所理論」の「場」の捉え方は、上記の物理学や生物学における「場」の捉え方とは多少異なる（メイナード、2000他）。物理学、生物学における「場」が「(主体も含めた)要素間の相互行為を引き起こす場」であるのに対して、言語分析における「場」とは、その場にいる状況の参与者・要素間の相互行為を含めたものでなく、概念化者としての主体が認識する世界を指す。それにより、状況下に置かれたた要因との相互行為を観察は対象から外されることになり、「主体」対「主体が認識する世界」という二項対立の構図の中で、「主体が認識する世界」を「場」として扱うことになる。主体についてはメルロ＝ポンティの身体論に近い立場をとりながらも、「主客分離」については厳密に区別するという、独特な「場」の捉え方をしているといえる。

本書における「場所理論」も言語研究（もう少し厳密に言うならば、認知言語学的立場）における「場」と同様の捉え方をしており、特に言語表現の「場」における空間的位置関係を定義付けるものとして、格に注目している。「場所理論」の歴史の中では、格の研究は、ギリシャ語ラテン語に存在する格を、「場所理論」的な範疇にどのように対応させるかから始まり、イエームスレウ（1972）やアンダーソン（1971）へと発展していくが、本書でもそれらの成果をもとに、今日の日本語や英語における格の体系性を記述している。

理論的な枠組みを説明したのち、いくつかの断章をはさみ、〈変化〉と〈状態〉の構造型（動詞のアスペクトに対して、どのような格、どのような名詞句が共起しやすいか）、〈使役〉と〈受身〉の構造型について分析を行っているが、この二つの構造型の分析と同等に重要だと思われるのが〈起点〉と〈到達点〉の非対称性についての記述である（Pp. 121-170）。

この断章では、従来、言語の線状性という特性において、語順が情報構造の優位性を示すものであることは指摘されてきたが、格関係においても、情報構造上の重要度において優位性の差が存在することが指摘されている。

例えば、(1)a では、「場所理論」的には〈この本〉が〈彼〉から〈私〉に移動することを意味しており、〈彼〉は〈起点〉、〈私〉は〈到達点〉となる。従って厳密には、(1)b のように言い換えることができる。

- (1) a. 私はこの本を彼にもらった。
b. 私はこの本を彼からもらった。

しかし、慣用的には(1)aの方が自然と感じられることから、本来〈起点〉であるはずの〈彼〉に〈に〉という〈到達点〉を意味する表現が使われる方が自然と判断される場合があることが分かる。〈から〉と〈に〉は〈起点〉と〈到達点〉を表す点で反対の意味を表す表現にも拘らず、〈起点〉を

表すのに<到達点>を表す表現が使われていることになる。

では、逆のことは起こるのか。(2)aのように、<起点>を表す<彼>が<から>で表されても、(2)bのように、<起点>がそのまま<到達点>のような言い方をすることはできない。

- (2) a. 私はこの本を彼から受取った。
 b. *私はこの本を彼に受取った。

このように、表現の交代の可否において、<起点>と<到達点>では非対称性がみられるが、その原因として、構造型の分析の章で述べられているような、事態の抽象度の差が関係していることが説明されている。本来であれば、<起点>と<到達点>は、変化の<はじめ>と<おわり>であり、論理的には等価であるはずであるが、言語表現や意味的振る舞いから見た「価値」から見ると、両者は決して等価ではなく、言語化する際には、<到達点>の方により注意が傾斜する傾向があると指摘している（「<到達点>志向性」）。

実はこの傾向は、言語の様々な現象の中に見られることから、言語ごとの表現傾向や、意味的価値を考える上では、詳細については紙幅の都合上割愛するが、緻密な分析に基づく記述がされており、非常に示唆に富んだ指摘がされていることから、詳しい内容については、ぜひ本書にあたっていたきたい。

3. 本書の意味研究における位置づけ

本書を紹介するにあたり、強調すべきポイントは二つあるように思われる。

一つは、これまで漠然と、しかし直感的に感じていた「同じ記号体系であっても、言語が異なれば、その表現上の発想や視点が異なる」ということを、英語と日本語の対比から「[「する」的な言語]と「[「なる」的な言語]」という言葉で、明確に示した点である。直感を説明することほど難しいことはないが、それを緻密に、かつ理論にしっかり依拠する形で分析、説明している本書は、言語研究における説明のあり方、分析のあり方、また結論の示し方において、手本となるのみならず、言葉で証明していくことの重要性を示してくれている。

もう一点は、本書が、「場所理論」という当時まだ知る人の少なかった理論を用いて、言語研究のパラダイムシフトを引き起こすきっかけを作ったという点である。近代科学の大きな特徴として、「主客分離」と「要素還元主義」を挙げることができる。ここには、観察者である主体とは別に客観的世界が存在し、その客観的世界は要素に細かく分けることができるという前提がある。さらに、各要素は原則、全体の構造の中で等価な価値を持つと考えられ、個体としての同一性を維持したままで、他からどのような影響を受けるのかをもとに、現象の因果関係は説明されてきた。しかし、「場の理論」の台頭により、個体からではなく、個体が置かれた場を含めて現象を考えることの重要性が指摘されるようになる。個体は常に同一ではなく、状況により、異なる性質や影響を受ける。また、個々の個体の性質を把握しておけば、常に同じ結論、全体像が得られるわけではない。個体よりも個体が置かれた「場」（環境、条件、構造）こそが、現象を生み出すメカニズムをとらえる上で重要なのである。

このような研究上の視点の変換は、分野間で同時に起こる（もしくは影響を受けあう）ことが多く、物理学や生物学、経済学の分野で言われ始めたころと同時期に、言語学でも同様の発想で言語の分析

ができないか考えられるようになる。日本においても1980年代ごろから、認知言語学という枠組みの中で、「場の理論」的な視点で研究が行われるようになり、そこでは、物事を言語化する認知主体は、絶えず身体や意識、知覚を通して環境を認知し、それを言語化することから、認知する主体や環境と離れたところで言語を考えることはできないと考えられた。しかし、当時はそれをどのように研究方法として具現化するかが大きな問題となっていた。

このような状況の中で、本書が果たした役割はとても大きく、今日のポストモダンの研究手法の基礎を形成した一冊であり、言語研究のみならず、言語習得、言語教育、言語学習、様々な言語に関わる分野に影響を与えているといっても過言ではないと思われる。

5. 河村茂雄著『授業づくりのゼロ段階』

図書文化社 2010年 ISBN:978-4-8100-0576-9

平成32年度より順次実施される新学習指導要領において注目されている点の一つに、「確かな学力の育成」がある。このことに関連した学習指導要領改訂のポイントとして、「何ができるようになるかを明確化」することや、「これまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化」することの重要性が指摘されている（文部科学省，2017）。つまり、これからの教員には、今まで以上に授業を充実させることが求められているだろう。

このことに対し、本書では、「授業は学級全体で取り組む集団活動」と位置づけ、学級集団の状態に合わせた授業展開の重要性について論じられている。具体的な構成は次の通りである。

第1章 授業を充実させる知識と技術

第2章 「かたさの見られる集団」に応じる授業の工夫

第3章 「ゆるみが見られる集団」に応じる授業の工夫

第4章 「荒れ始めの集団」に応じる授業の工夫

第5章 授業を支える集団対応と個別対応

以下、各章について紹介する。

第1章では、「授業は学級全体で取り組む集団活動」であるため、①建設的な集団活動が成立する学級集団の状態を成立させる、②学級集団の状態に合わせて授業を展開する、③教師が自分の指導行動の癖を把握する、ことが重要であると論じられている。そして、①～③を理解する上でのポイントを、以下のように指摘している。

①と②については、学級集団の状態を把握するための枠組みとして、「ルール」と「リレーション」に注目している。ルールとは対人関係に関するルール、集団活動・生活をする際のルール、教室に集った子どもたちにとっての共通の行動規範・行動様式のことである。リレーションとは、子ども同士や子どもと教師との間において、互いに構えのない、ふれ合いのある本音の感情交流がある状態のことである。そして、ルールとリレーションが確立されている学級集団では、子どもたち同士が自ら協調的に学びあえる雰囲気があるため学習が深まりやすいが、リレーションが確立していない学級集団（かたさの見られる集団）、ルールが確立していない学級集団（ゆるみが見られる集団）、ルールとリレー

ションの両方が確立していない学級集団（荒れ始めの集団）では、それぞれ授業展開に難しさが生じることを指摘している。

③の指導行動については、教師のリーダーシップをPM理論（三隅，1984）の枠組みで捉えることの有効性を指摘している。具体的には、目標達成や課題遂行の機能であり学習指導や生徒指導の遂行に関する機能であるP（Performance）機能と、集団維持機能であり学級内の好ましい人間関係を育成し、子どもたちの情緒の安定を促したりする機能であるM（Maintenance）機能から捉えるものである。そして、P機能の発揮が強い教師は「かたさの見られる集団」、M機能の発揮が強い教師は「ゆるみが見られる集団」、P、M両機能の発揮が弱い教師は「荒れ始めの集団」やばらばら集団になりやすいなど、学級集団の状態とも関連があると指摘している。

これらのことを理解し、把握することが、授業を充実させるためのスタートラインになると示唆している。そして、次章以降では、各集団に応じた授業の工夫について紹介されている。

第2章では、「かたさの見られる集団」についてである。この集団のプラス面として、私語なども少なく授業は静かに行われている、授業展開もシンプルで明確になり、授業は整然と行われている、教師の指示が受け入れられる状態になっている、などが挙げられている。その一方で、マイナス面として、学級内の学習意欲・活動量に子ども同士の間で階層が生まれている、失敗することをおそれ発言や発表が少なくなる、教師に指示されたことだけをやるようになる、などであると指摘している。そのため、①子どもたちの活動量・自己表現を促進する、②すべての子どもが認められる場面を設定する、ことが重要であり、①と②を考慮した授業展開の骨子については、次の点に留意する必要がある。

- ・ほとんどの子が取り組みやすいことからスタートする
- ・ワンパターンの授業展開にしない
- ・すべての子が認められる場面を設定する など

これらのことを意識した授業展開が求められると指摘している。

第3章では、「ゆるみが見られる集団」についてである。この集団のプラス面として、教師に対する緊張感が低く自己表現しやすい、授業は明るくにぎやかに行うことができる、教師に意見や考えを言いやすい、などが挙げられている。その一方でマイナス面として、なれ合いの状態が生まれやすく学習意欲・活動量が低下しやすい、子ども同士が小グループで固まり授業の展開に支障をきたす、場当たり的な活動になりがちでまとまった成果を得られない、などであると指摘している。そのため、①規律ある学習活動の楽しさを体験させる、②規律ある学習活動の展開を習慣化させる、ことが重要であり、①と②を考慮した授業展開の骨子については、次の点に留意する必要がある。

- ・授業におけるルールを定着させる
- ・短時間で指示が通るような工夫をする
- ・時間を設定し、一つの活動をやり切らせる など

これらのことを意識した授業展開が求められると指摘している。

第4章では、「荒れ始めの集団」についてである。この集団では、かたさの見られる集団、ゆるみ

の見える集団のプラス面が喪失してしまっている状況であり、マイナス面が目立つ状態である。具体的には、私語、身勝手な行動、妨害行動が生じ授業の進行を妨げる、教師が一貫した学習活動の展開ができない、学習内容が定着せず授業の進捗が遅れてくる、などが挙げられている。そのため、①指導の正当性を確立する、②個々の学習を保障する、③学習に建設的に取り組もうとする子が多数派になるようにする、ことなどが重要であり、これらを考慮した授業展開の骨子については、次の点に留意する必要がある。

- ・ 定めた型に沿った授業の展開を行う
- ・ シンプルな展開にし、学習内容、やるべきことを明確にする
- ・ 学習内容を保障するために、個別学習の比率を高める など

これらのことを意識した授業展開が求められると指摘している。

第5章では、集団対応と個別対応の留意点について論じられている。上記したように、「授業は集団活動である」と捉えると、授業を「よい集団活動」として成立させるためには、授業の構成、展開のリズムとテンポが重要であると指摘している。さらに、授業中における個別対応は周囲の子どもへの影響が大きいため、子どもの感情に巻き込まれないための手段をもつ、その場に適切な対応をとり授業場面外の対応をつなぐ、などが求められることを示唆している。そして、以下に示したような個別対応には、特に注意が必要であるとしている。

- ・ 中途半端に対応してあきらめた
- ・ 小さなルール違反をあえてスルーした
- ・ 逸脱行動などに対して怒鳴りつける など

これらの個別対応は、当該の子どもの問題状況を改善しない可能性が高く、なおかつ、周囲の子どもの逸脱行動などを誘発する可能性があるためであると指摘している。

日本の学校教育では、学習指導と生徒指導が両輪となり、学級という集団単位で展開されることが特徴である。そのため、子どもの確かな学力を育成することを目的とした取り組みを実施する際には、学級集団の状態に合わせた展開が求められることを、本書は示唆しているだろう。今回は紹介できなかったが、本書にはより具体的な指導行動のあり方なども紹介されており、示唆に富んだ内容となっているため、一読することをお勧めしたい。

引用文献

三隅二不二 (1984). リーダーシップ行動の科学 (改訂版) 有斐閣

文部科学省 (2017). 学習指導要領のポイントなど

〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384662.htm〉 (2017年9月9日)